

えなかつた。永月に互つて積み上げられた一つの体系を前に、臆面もなく敢えて連ねた些かの批評は、自らの研究姿勢を点検し、自戒する意味をも込めてのものである。批判はたやすい。が、著者の目論み格闘している課題の重さに着目するとき、その苦悶がひとり著者のみのもではなく、古代歌謡の、というよりも古代文学の研究に立ち会う者に共通のものであることを思わずにはおられないからである。

著者には、他に初期万葉集についての論稿等もあり、それらが総合されて、さらに多角的な古代歌謡（古代のウタ）の構造の論が示されることを期待して待ちたいと思う。さぞかし見当外れの言述もあつたであろうが、ご海容を乞う次第である。

（宮岡薫著『古代歌謡の構造』、新典社、昭和六二年一〇月刊、四一五ページ、九八〇〇円）

（こまき・さとし 同志社大学教授）

## 書評

### 上田博著『石川啄木の文学』を読む

太田 登

近年の啄木研究は従来の伝記研究にかたむきがちであつた動向に清新な潮流を呼びこもうとしている。その最前線に著者上田博がいる。かつて『啄木 小説の世界』（昭55・9 双文社出版）では

とんど黙殺にちかい扱い方をされつづけてきた小説をその犀利な分析によつてよみがえらせた著者は、「日本近代文学の総体のうちにきわめて高い位置を占める」（小田切秀雄）、「明治期の文芸評論の第一級の古典に属する」（猪野謙二）とされながらトータルに把握されていない評論にも鋭い切りこみを示した。

本書は、評論研究の対象となる八十篇のうちから九篇を選び、それぞれをひとつの「作品」として読解してゆく「評論篇」と、前著で論じたこした小説を対象とした「小説篇」の二部から成つている。第一部の「評論篇」の冒頭におさめられた「序説 啄木評論の展開」は、おそらく本書を成す際に書きおろされた論者のようにみえるが、著者自身の多年の啄木研究によつて固められた航海表の公開であつたかもしれない。前著ではその巻頭の「序説・小説家啄木」で十五篇の小説を四期に区分された文学的生涯によつて跡づけているが、本書においても同様の方法がとられている。小説・評論のいずれにおいてもそれを啄木自身の文学的立場の展開にそいながらパースペクティブに考察しようとする方向が著者によつてはじめてあざやかに打ち出されたといつてもよい。ともかく、評者啄木の批評的立場を三期に分けて、その史的展開の諸相の特質が論じられる。第一期（明34・9～41・2）では、「啄木は樗牛によつて個人主義を確立し、嘲風によつて普遍性を広げつつその根底を深めた」ところにこの時期の批評的立場の特徴をみる。第二期（明41・3～43・5）では、天才主義の人間観から「普通人」の人間観への、浪漫主義的文学観から自然主義的文学



観への転回点に、田中王堂のいう「具体理想主義」II プラグラムチズムの影響をうけた「弓町より」を位置づけ、思想的にも文学的にもあらたな批評的見地を求めて模索する痕跡をたどる。第三期（明43・6～45・1）では、「事実」を発掘し、それを作品化する記録文学としての性格をもつ大逆事件に関する〈書く〉行為を明らかにする。「硝子窓」（明43・6）を書く啄木の「傷の痛み」が「押えきれない不安と焦燥のうちには大逆事件に遭遇する」（P27）という見解はあまりにも明快に割り切りすぎるように思えるが、「表現の直接性」において短歌と評論とが共通性をもつという観点から、〈自らも傷つくことの湛大なジャンル〉である評論の史的展開をパースペクティブにとらえようとする姿勢には大きな敬意を払わねばならない。

さて、第一期では、「戦雲余録」（明37・3・3～3・19）「浜民村より」（明37・4・28～5・1）「秋草一束」（明37・11）「閑天地」（明38・6・9～7・18）によって、啄木におけるロマン的自我のありようを検証する。啄木にとって日露戦争はたしかに「ロマン的自我の拡大再生産の格好の場」であった。その日露戦争の開戦から終結にいたる時期の啄木のロマン的自我の行方をまさに「戦雲余録」から「浜民村より」という文脈の微妙な推移のなかに著者は鋭敏に察知する。「啄木は、樗牛のなるものを引き摺りながら、嘲風の人格と認識を水先案内にして、自己のナショナルなものもそれ自体を相対化し、その意味するところを検索する方向へ進み出ていた」と。そして、「その意味するところを検索する方向」は、次

『石川啄木の文学』を読む

章の「秋草一束」論でより具体的に考察される。「秋草一束」が初期評論の中核をなすものであることはもとより自明のことであるが、第二期の「きれぎれに心に浮んだ感じと回想」（明42・12）論とともにその言及には啄木評論を「作品」として読解したいという著者独自の内的モチーフがあまねく反映しているといえよう。ともあれ、樗牛・嘲風のロマン主義にその形質を与えられながら、それらと微妙なズレを生み出す啄木の場合は、樗牛が日蓮を、嘲風がワグネルをそれぞれのロマン的心情の焦点に結ぶ対象としてもちえていたのに対して、いまだその対象を所有していないと著者は説く。かかる差等によって、たしかに「両者のロマン主義の、その後を描かれる軌跡の方向の分岐がすでに予想されることになるはずである」。が、あえて著者の言辞にこだわらねば、啄木の場合は「自信」か「盲信」かとまさに自問しながら〈我れ〉みずからをその対象とする詩人意識が存在の基盤であったのではないか。別言すれば、すでに木股知史も指摘するように「樗牛から嘲風へという一方通行の回路に、初期批評の振幅を封じ込めてしまうと〈第三期〉における樗牛への関心の復活の理路を解明できなくなる。」（『日本文学』昭63・3）というおそれもある。「閑天地」論では、土井晩翠をさして「幸福なる詩人」といわねばならぬ啄木の内心に、「赤門校裡の書窓より新声を絶叫したる」詩人という意味を越えるある意味」を読みとろうとする。そして、そこに「傷ついた〈現在〉を〈過去〉によって慰撫し、霊的根拠を確認し、〈未来〉へ向けて生命を自らのうちに汲み上げ



る」という積極的な意味を見きわめようとする。

つづく第二期では、「汗に濡れつゝ」(明42・7・25～8・5)「きれぎれに心に浮んだ感じと回想」「文学と政治」(明42・12・19、21)によって、浪漫主義的文学観から自然主義的文学観にいたる批評活動の内実を究明する。「汗に濡れつゝ」論は、第三期の「我が最近の興味」(明43・7)論とともにそのしなやかな文体によって、書きおろしのもつさわやかな魅力を感じさせる。日常生活のへ瑣末のなかに意味を発見する喜びによって、「二重化した自己を俯瞰する」立脚地点によりやく啄木は立ちえた。だからこそ、「汗に濡れつゝ」は、「啄木の文学的・思想的・人間的な展開のうちにあつて、いわば分水嶺の位置を占める評論として読むことができる」と著者は断言する。しかし、あの八方ふさがりの半独立者生活を知るわれわれには、この断言は「ちと奇麗事すぎる」ように思われる。ところが、次章を読みおえたわれわれは、そこにこそあえて軽妙に書き流すかのようによそおう著者特有のレトリックの魅力があることを教えられる。その「きれぎれに心に浮んだ感じと回想」論は、木股知史も看破したように「各論の中でも「ともスリリング」である。と同時にそれが語り、おろしにも似たいわば上田節のみごとな開花によるものであることも見逃してはならない。ながく著者の仕事に注目してきた後学の一人として、上田博はこの論によってきわめてオリジナナルな研究文体を築きえたのではないかと羨ましくさえ思う。「今日までこの評論について、トータルな読みを示した考察はなかった」が、著者のその鮮度の

たかい文体によってはじめてトータルな読みが示されたといつてもよい。その意味でも本書を手にする読者は、取りあえずこの章から読みすすめることをすすめる。「汗に濡れつゝ」論をいかに軽やかに書き、「きれぎれに心に浮んだ感じと回想」論をいかにスリリングに書くのかという、心にくいばかりのもくろみに驚嘆するだけではなく、著者によってはじめて啄木の評論がペースペクティブにとらえられる方向が打ち出されたという所以もおのずから明白になるであらう。

ところで、王堂田中喜一のプラグマチズムの哲学的立場を理論的根拠として、啄木がどのようにして「二重の生活」を克服し、「生活を真に統一」しようとしたかを、この評論から著者は「読み」とらうとする。そして、〈理想〉をつつましい日常生活の内側に発見し、その日常の裂け目を再統一する方向を探ることにあつた、と結論づける。自己の批評的基準はたとえ断片の集積であるにせよ生活の内法（うちりつぽう）を計測することでは求められない。かかる生活詩観に立てば、この評論は啄木の思想的展開において「中じきり」の意味をもつ。しかし、否、それだけにといふべきか、「食ふべき詩」が「詩人啄木にとつても大事な中じきりであつた。」という今井泰子の指摘を引き合いに出すのならば、むしろ第三期の「硝子窓」(明43・6)を啄木の思想上の中じきりとする今井の立論のありようを、さらに「食ふべき詩」をもって今井説に反論する石井勉次郎の論考を本論に組みこむべきではなかったかと思ふ。



「文学と政治」論では、「積極的自然主義」を自己の文学理念としてひそかにその念頭に置いていた啄木が田中王堂の「具体的理想主義」を基盤に据えて、島村抱月のいう〈画一線〉のもとに自閉する自然主義論とは異なるみずからの自然主義論の内実化に向かう軌跡を明確にする。

さらに、第三期では、「時代閉塞の現状」(明43・8稿)「我が最近の興味」「平信」(明44・11・3〜11・18稿)によって、大逆事件にかかわる「文明批評」に記録文学としてあらたな文学概念の形成を検討する。「時代閉塞の現状」論では、魚住折蘆の「自己主張の思想としての自然主義」への反指定という思想的文脈のなかに折蘆と樗牛をとともども引きこむ手口に「時代閉塞の現状」を書く啄木の意図をよみとろうとする。そこに「自己の浪漫主義的思想の支柱であった〈樗牛〉的思考、世俗からの敗亡意識と闘う武器でもあった選良意識、天才意識の自己精算の意味」を著者はきわめて明快に剔出する。かかる著者の論点に従えばこそ、第一期での前述のおそれもあながち見当はずれだとはいえない。やや性急にいえば、「私の文学に求むる所は批評である」という「時代閉塞の現状」の有名な結句は、樗牛によって啓発された「勇ましい人生の戦士」たらんとする自己規定を命脈とするものではなかったか。たとえ「無邪気なる愛国の赤子、といふよりは寧ろ無邪気なる好戦国民の一人であった」(明41・9・16日記)というように、その自己規定が啄木の内部から次第に光彩を喪ってゆくにせよ、「強権」国家と闘うためには最後にはこされた有効な武器であり

えたはずである。つまり、著者のいう「〈国家〉個人との全般的な考察を基礎に、人間主体の確立を企てる」ためにも、大逆事件後の啄木は嘲風というフィルターをとりはずして樗牛と真正面から向き合うかたちで、三十年代後半の〈宗教的欲求の時代〉における個人と国家との確執の内実をあらためて検証しておかねばならぬ位置に立たされていたのではないか。

「我が最近の興味」論は、永井荷風・森鷗外・木下杢太郎らのまなざしに映った車内と街上の光景のありようを比較しながら、啄木の車中で民衆を「観察」する目的を明らかにする。車内という空間は、いわば他者の視線にとりかこまれて「個」としての人間認識を多彩に紡ぎだす世界でもある。剣持武彦にも「車内空間と近代小説」(『事実と虚構』昭61・6)という興味あるモチーフへの論及があるが、著者のそれは民衆の個とのあいだに交錯する行動と心理の機微をへあるべき現実」というフィルターでとらえようとするユニークな視点をもつ。「平信」論では、貧困と病苦のなかでクロボトキンとの思想的結合をめざしつつ、公開書簡体のスタイルで岡山儀七宛に手紙を書く志に「時機を待つ人」の群れからどれほど遠去かることが可能かを賭けようとする啄木の真意をくみとる。

第二部の「小説篇」は、冒頭の「啄木と白鳥」を別にすれば、「葬列」「漂泊」「天鷲絨」「二筋の血」「葉書」「道」に関するそれぞれ独立した作品論をまとめている。「啄木と白鳥」論は、評論と小説とのかわりをいわば啄木文学全体の枠組みでとらえよう



とする重要な視点をもつ。啄木における〈白鳥的〉なるものへの反発、交差、接近、離反の様相を二人の交渉とその作品の比較とによって分析する。とくに白鳥的人間像との本質的な差違を明らかにすることで前著所収の「我等の「一団と彼」論により深い読みこみもたらされたことはよろこばしいかぎりである。「葬列」論では、モデル問題に新局面をひらき、評論「林中書」で高揚した啄木の浪漫主義の骨格を「葬列」の小説行為そのものに掘りおこそうとする。北海道にその足跡を記した小説第一作「漂泊」に「近代市民社会からの落伍者の意識」にもとづく啄木の自然主義的傾向をさぐる「漂泊」論。都市の「劣敗者」の「思郷の涙」ともいべき「天鷲絨」に、お定の形象から「故郷（農村）||自然」

「東京（都市）||非自然」の構図を引き出し、現実の場で宙吊りになった啄木にとつての〈故郷〉の意味を考察する「天鷲絨」論。「二筋の血」論では、国木田独歩「画の悲み」との関連に注目し、小説の主題が「智慧の女神」への懷疑に生起することを読みとる。白鳥・独歩とならんで田山花袋にも切実な影響をうけた啄木は、まさに花袋文学に正面から向き合うかたちで小説「葉書」を書くこととする。「葉書」論では、「田舎教師」の創作方法にひきずられながらも「きれきれに心に浮んだ感じと回想」で〈田山氏の人としての卑怯〉をきびしく突きあげるようになる啄木の内的状況について言及する。もともと、花袋のいう「描写」を前面に押し出すことで「徹底的象徴主義」をめざした「道」も失敗作であったと啄木は認めることになるが、「道」論では、「青年が老人を嗤う

その不毛性」に失敗の意味をときあかす。

著者は、本書のあとがきで「これで一通りは啄木の全小説を読んだことになる。内容はともかく、わけもなくほっとしている。」という。本書によってわれわれは実に多くのことを教えられたが、「平信」を含む大逆事件にかかわる一連の評論（記録）を〈書く〉行為が晩年の啄木にとつてどのような深い意味があるのかという問いかけにはころよい興奮さえ覚えた。さらに啄木文学の諸ジャンルを有機的に通底させようとする意欲がテキストの緻密な読みを可能にしたといえよう。「天鷲絨」論での「暇ナ時」詠出歌への目配りや、「道」論での評論「汗に濡れつゝ」への言及にそれは明白である。

最後に、本書の巻末にまとめられた「啄木評論・感想執筆年表」「石川啄木年譜」「石川啄木参考文献」にも著者の研究方法の成果はあまねく生かされていることを付記するとともに、本書で論じ残した「古酒新酒」「林中書」「卓上一枝」「弓町より」「硝子窓」などの評論を含めた啄木論がより大きなパースペクティブのなかで体系化されることを心より期待したい。

（昭和六十二年四月、桜楓社刊、三一八頁 四八〇〇円）  
（おたのぼる 天理大学助教授）